分枝 *branching*

http://branching.jp
branching 22 publish : 09.September.2017

少立 キャンバスに油彩 φ530 mm

しりとり

Tomoro KAWAI 1976-
川合朋郎

オトウサン シリトリ シヨウ

あぁ いいよ

ジャアネ〜 ニッポン！ア ダメカ

川合朋郎 Tomoro Kawai
1976 年大阪出身
東京藝術大学大学院修了
http://tomorokawai.com

個展
GALLERY エクリュの森 / 静岡・三島
2017 年 10 月 31 日（火）〜11 月 17 日（金）日・月 休廊

日記 (8 月 13 日)

Yoshiaki HIKITA 1994-
疋田義明

お盆に入り、母と妹と祖母の家に向かった。祖母の家は、僕の家から車で 30 分程したところにある。祖父は亡くなっていて、祖母が一人で暮らしている。車を走らせ祖母の家の近くまで来たところ、車道の真ん中に 3 つの塊が転がっていた。近くで見たところ、獣の死体のようだった。黄土色に焦げ茶の毛の間から淡いピンクと赤の鮮やかな肉がこぼれていた。

祖母の家で、祖母を拾い、車で祖父の墓に向かった。空には灰色く雲が重なり覆っていて、時折、パラパラと雨粒を落としていた。お墓に着き、本格的に雨が降る前にと、母と祖母が勢い良くお墓をタワシで擦っては水で流していった。僕もチョロチョロとたわいて墓石の隙の角っこを擦っていると、いつの間にやらタワシの先に何匹かの蜘蛛を絡めとっていた。まだ 1 ミリにも届かないか位の小さな体で、生まれたばかりのようだった。墓石の角っこを よく見てみると、1 センチメートル程の白い繭のようなものがいくつも引っ付いているのを見つけた。どうやら蜘蛛の卵のようで、それをタワシで絡めとったようだった。何とはなしに、地獄に垂れ下がった一本の蜘蛛の糸が頭に浮かび、掃除を錯覚っていたが、最後にはほとんど洗い落とされたようだった。

お墓参りも終わり、帰る頃。丁度、溜まっていたものが溢れだしたように雨が強くなってきたので、急いで車に乗り込んで帰ったのだった。

疋田義明 Yoshiaki Hikita
1992 年長野市生まれ
画家（無職）
2015 年武蔵野美術大学油絵学科卒業
za49dzzch4vc7v7mm6cu@docomo.ne.jp

トポスパブリック
疋田義明の絵画
@ 医療法人北島眼下クリニック
2017 年 4 月 -6 月

「流れ / flow」水性木版画 900×1500mm 2015

流れ / flow

Ayaka NAKAMURA 1988-
中村綾花

雨が降っていて、ずっと 6 時 20 分の世界に居るようだ。
風の中にひと雫が動って
きっと明日もそうなんだろうなって思う。

流れることもなく
帰ることもなく
行く 行く ゆく ゆく

先がどうなっているのか分からないのに
明日は生きているんだろうなってことが不安だよ。

中村綾花 Ayaka Nakamura
1988 年生まれ 奥術家
2013 年、武蔵野美術大学油絵学科版画専攻卒業。
手描きをメインに、繊細かつ力強い版画づくりを目指し、
ミュージックビデオやテレビ番組のアニメーション、装丁のイラストなどを手がける。
映像作家 100 人 2015BNN 出演 に掲載。
木版画家・ペインターとしても国内外で活動している。
六本木アートナイト 2016 では隅 7m の巨大ライブペイントを行う。
info@ayakanakamura.com
http://ayakanakamura.com

二泊三日の念彼観音力

Ami IMAI 1990-
今井あみ

みょうがの近くにはみょうがが生えている
わらびの近くにはわらびが生えている

「黒い雲があるけどすぎ間からピンク色が覗いているから明日は晴れるわね。」
「ようやく溜まってた洗濯物が外で干せるわ。」

「それがね、うちで採れた大根を今まで卸していたスーパーが引き取ってくれないのよ。」
「うちもこの前採れたトマト引き取ってもらえなかったのよ。」
天気を予測したあと、近所のスーパーについて意見を交わす夕暮れ時の霧天風呂

床に落ちたきゅうりは水で洗えば食べられるけど
こぼれた牛乳は水で洗うとなくなる

光った雷は 6 秒後に音を鳴らしたから、まだ遠いって安心していた
そしたら、次の瞬間目の前に落ちるとか
電子レンジがチンって鳴ったから急いで行ったら、棚に足の小指をリっかけるとか
一瞬にしてうめる
長いこと考えていた問題は雷と同時に頭から姿を消していたり、
頭が痛かったはずなのに、ぶつけた小指の方が痛くなって、蒸したタオルを取り忘れたり、
変えようとしても変わらなかったことが、
変わってほしくなくてそーっとしていたことが、
スコーンッと一瞬で今をかっさらって、変わる
ポンッと一瞬で未来を跳ねっていって、変わる

止まった心臓はもう自然には動き出さないし
死んだ細胞は生き返らない

大体の雨の降り始めは腫レ
雨だよーってお知らせしながら粒を徐々に増やしていく
もっと優しい雨は粒を落とす前にないでお知らせしてくれる
そうやって、雨に濡れない方法を探す時間を与えてくれる

ゲリラ豪雨は突然ジャバーンッって降るから、諦める
ピチョピチョになった靴と服で歩けば、もう濡れない方法を探さない

そのあと、雨に濡れないようにって雨宿ったのに少しだけ濡れた肩が気になった
ビッチョリ濡れたときは、諦めない

あぁもったいないもったいない
一滴も無駄にしたくないって水浸しになったスポンジがボタボタと水を垂らしている

「君はここへ来たばかりなんだから、分からないことは分からないって言いなさい。これは何ですか？って。」
夏の町工場から聞こえてきた

今井あみ Ami Imai
1990 年長野市生まれ
表現する人
表現することをつづけるため、まいにちを過ごしている
imaiami1990@gmail.com
imaiami.net

媚ぶる系について

Biwa TAKAHASHI 1972-
たかはしびわ

売り系とふ系ありて、多分は浅ましる。売られると、ふ売り人、買ふ人に媚ぶ、己が系を曲がや系なり。

媚ぶる系は売り系のみにあらず。名を上げようと、道の者、定安者など賢げな人に媚ぶるさま売り系のごとくなる、なべて媚び系とこそまうしけらめ。

媚び系のおほかたは家の内にならざめり。媚びし人のいしくもはざゆゑ系なり。余所の心村ゆ難きゆゑ、もし余所のいしき系を描かむとせば、あるかぎり捉てるるとほりに描くべし。さあらば余所が描くがかたちかなうむ。

詮ずる所、己が心に染め系のみぞ描かかずる。媚ぶならば己に媚びなむ。

たかはしびわ Biwa Takahashi
画家
1972 年東京都生まれ、長野県在住
長野二紀会会員 日本ペンギン党党員
1997 武蔵野美術大学油絵学科卒業 2006.7 〜「香川さくらいら」にて「さくらいら美術賞」
隔週連載（2008 年 7 月から 4 週に一度の掲載）2007、奈良県立新潟短歌賞イラスト担当
たかはしびわのページ http://takahashibiwa.web.fc2.com

NAGANO ひとびや案生による 第 3 回小さなアート祭
2017 年 9 月 16 日〜9 月 24 日 ライフプラザ ゼリオ（長野県民総合市）
第 71 回二紀展 2017 年 10 月 18 日〜10 月 30 日 国立新美術館
土屋明智・たかはしびわ・須藤友月 3 人展 2017 年 11 月 ギャラリー柱（中軽井沢）

「未来」ー放たれた鳥はまた再び此処へー

Yui MIFUNE 1972-
三船ゆい

夜は静かにやってくる
誰一人として残さず
明けることのない夜
重く深く染み込んでいく
幾多の希望ある言葉とて
すでに傷んだ食物の様に空回り
「明けない夜はナイ」
抗えぬ秩序と法則
どんなに手を尽くしても悉く
貴方の最善を尽くしても悉く
消耗を操り人形
夜は静かにやってくる

しかし、何も恐れることは無い
闇を迎えるその時は
緩やかな旋律に耳を澄ます様に
空想の幕を開けるがいい
目を開けて
その母を世界に投げ出して
肉体を離れよう
何処かにきっと
誰かの真実が
朝を告げるトランペットの如く鳴り響き始めるだろう
夢の中へ

気が付けば
ただひたすら前を向いて歩く 日常の中にあって
過去を取り戻すように
1 日 1 日を積み重ねていた
あれほど探し求めていた
明日の光は
目の前の小さく無抵抗な子羊達の腕の奥にこそ
映ってみえるのだった
夜明けもまた静かにやってくる

その腕は見つめている
愛の結実

ー family ー
貴方は最善を期待しながら
最善を尽くすだろう
明日の光は
貴方を見つめている
世界を見つめている

三船ゆい Yui MIFUNE 1972 年生まれ
長野県出ノ内町在住 自営業

トライアングル

Ko OTA 1989-
大谷祐

子どもの頃、トライアングルというパンが大好きだった。
家から歩いて数分のところにあるパン屋さんにトライアングルは売っていて、パンを買いに行くと必ず買っていた。クリームパンのほうが大人っぽくていいかな、なんて思ったこともあったけれど、トライアングルを見てしまうと、なかなか他のものは買えなかった。それでも、大人になるにつれてあまり食べなくなった。本物のパンに出逢ってからは、買いに行くこすらなくなった。ああ、大人ってかたい。バゲットをかじり、ライ麦のパンを齧り、世慣れした表情を浮かべたりしている。ああ、大人って残酷。

トライアングルは昔ながらのパン屋さんに時々は家族の誕生日用のパンを買いに行くこともあった。三角形だからトライアングル。あるほんのりともクリームパンとも違う甘いパン。彼らのようにスタンダードのパンはならなかったが、その存在感はぼくのなかで大きく、ときどき思い出してしまう。なつかしいな、どこでなにしているのかな、と思うと、突然揺れる古い友人みたいに、古びた看板の目惜しみにパン屋さんに置かれていたりする。名前も変わらず、見た目もそれほど変わらず、その姿を見つけると、あ、トライアングルだ！と心躍らせて、子どもの頃のパンの記憶に戻ってしまう。

なんといっても、トライアングルはサンドされているチーズクリーム（合っているのかどうか知らない）がおいしく、外側のビスケット生地（正しいのかどうかさておき）がサクッとカリッとしている。カリッとしながら、中はふんわりとチーズクリームがほどよく浸みて、もちっとしている。食感と甘さの誘惑。すぐに思い出せる味。パンのなかには丸い銀紙が敷かれていて、二角から少し飛び出た丸みがなんとも愛らしい。昔ながらの製菓パンは然り。ほとんどのパンに銀紙は敷かれていた気がする。お弁当のおかずの下、ケーキの下、あらゆるところで銀紙を見かけた。アルミホイルなんて、最近の呼び名だ。ハイカラだ。銀紙で包まれていたパンは、一番しっくりくる。

トライアングルを食べているときに、銀紙ごと食べてしまったことがある。母に言われるまで気がつかなかったのだが、手に持っていたトライアングルの銀紙が一口分くっきりとなくなっていたのだ。どれほどまでに夢中で食べていたのか容易に想像がつく。変態のトライアングルがより先に、パンのほうを認識してしまうくらいなのだから仕方がない。

大谷祐 Ko OTA
1989 年群馬県出まれ
ko0ota@yahoo.com

夢日記

Masayuki TOKUNAGA 1960-
徳永雅之

1/29 2017「レコンキスタ」

夢のなかで、突然「レコンキスタ」と言う言葉が浮かぶ。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

4/12 2017「シルエットの男」

自分で車を運転してどこかへ向かっている。佐世保から諫早に行く時の風景を更に広く、美しくしたような景色。大きなアーチの橋を登る。標高が高く、まるでジェットコースターのような視界だ。降りかけた時、向こうから一人の若い男が登ってくるのが見えた。橋の下は水を張ったようにキラキラしていて、逆光に照らされた不思議で美しい眺めだ。僕はたのポケットから iPhone を出し、シャッターを押した。なんとか間に合った。男がいい感じで画角に入った。

6/14 2017「バイトたちと」

さほど広くない、古そうな作業場でバイトたちの到着を待っている。そこは一本道の車道に面していて、片側はそう高くない並木が続いている。彼らが近づいてくると、地図上でその位置が光って表示される。バイクに乗った若い男の子が到着。素直そうな青年。次にきたのはノーヘルで、頭に丸いツノがあった。一瞬、インターネットで見た、人体改造によるツノを持った、いかつい外国人の男を連想してしまったが、よく見ると小柄ですぐく気の強そうな女の子。ツノに見えたのは髪の毛だった。彼女は着くなり「うわ、この粉（埃？）ダメだわ！」と大声で不満をロに。だが次の瞬間、彼女はテキパキ動き出し、いつの間にか全体的に作業が始まっていた。作業台は何故か 30 度ほどの傾斜があり、そのまに段ボール箱が乗ってるのだが、その傾斜の意味が僕にはわからない。その方が何か効率的なのか？そもそもそこで何を作業するのか、僕にはよく思い出せないでいるのだが。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

6/16 2017「アマナのクロッキー教室」

アマナがさいたまのビルの一階でクロッキーのレクチャーをやっていたので、覗いて見た。部屋は暗く、二階席に大きな鏡が貼ってある。手前の方では立てた鏡の前で馬の首に見立てた、銀色というかメタリックなテープを絡めて作ったようなオブジェを数人が動かしている。奥では舞踏会にでも出ぞうなドレスを着たアマナが、タップダンスを踊るように、実にリズミカルに足を動かして馬が小走りに歩いている様を表現していた。スポットが彼女の足元に当たっている。バラバラに演じている首と前足を、それぞれ奥中央の壁に投影して一つの画面にしているようなのだ。僕は会場にそっと入り、彼女に気づかれないように それを見ている。演技が終わり、ドレス姿のアマナが隅から出てきて、満面の笑顔に照明が当たった。そこにいる人たちの集中力にも感心しながら、そのアイデア満載の教室が素晴らしすぎて、軽くショックを受ける。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

6/26 2017「時代劇」

僕は時代劇の中にいる。女が低木の中に立っていて、その前に自分がいる。僕の後ろに知らない者が二人ほど居て、その一人は武士か浪人風の男である。今自分が居るのは、どうやら離れ離れになっていた乳飲み子と女が再会する感動のシーンのようだ。女は嬉しそうに着物の襟をはだけて乳房を露わにした。豊満、そして「母の乳房」だ。僕は思わず女にしがみつき、乳首にしゃぶりついた。乳首は少し大きめで、存在感がある。後ろに居る侍たちの視線を感じたので、彼らに向かって、「これはつまり、僕は赤ん坊の視点になっている訳です」と説明する。なんだかすごい理屈で言い訳をしてるな…と思いつつも、白い胸はまだ目の前にある。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

7/18 2017「社会保険」

運転中、後部座席に乗っているアーティスト A 君が「これで随分良くなったな…」とつぶやいた。両手を頭の上で組み、妙に深刻な顔をしている。「何が良くなったの？」と聞くと、こちらを横目で見て「社会保険ですよ」と、ちょっと歯痛堪えるように言った。彼が居たはずの後部座席には女性のアーティスト B さんが座っていて、A 君は後部座席の、更に奥の座席に移動していた。「ふーん、社会保険？」僕がそう言うと、二人は顔を見合わせた。どうやら共通の認識を持っているようだ。僕はよく知らないんだけど、それが何のことなのか、良かったら教えて よ」というと、（そんなこと知らないの？）とでも言いたげな広頭面の A 君とは裏腹に、B さんはニコっと笑い、無言ではがきサイズのクロッキー帳を僕に手渡した。それは縦位置で使われ、開くと上の方のページに現成のかさいかレンダーが貼ってあり、下のページに日付入のスケッチが描かれていた。スケッチは短い時間で描かれた感じのもので、少し色も入っていた。彼女はちょうどグループ展をやっている最中なので、その展示の作品と関係有るのかもしれないと、カレンダーと日付とを確認するように何度かめくり直して見てみた。あまり関係は無さそうな印象だったので、そのことを彼女に質問をしたいいところで目が覚めてしまった。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

8/4 2017「幽霊の統計」

この場所で友人が遭遇したという幽霊の話をMさんにした。
「ここで人がどんな幽霊を見たのか、の統計としては、女性を見たという人が図人、子供を見たという人が図人…」
彼は真面目に、淡々と説明してくれた。

sketch drawing by Masayuki Tokunaga

4/26 2016「目を切られる男」

世の中がすっかり軍国主義のような雰囲気になってしまった。1 人の男が色の見え方について上官の気に入らないことを言ってしまったようだ。その結果、その場で、男は片方の目を刀で切られるという事になってしまった。目を切る任務を与えられたものは、切られるものへの礼儀として、目を背けず、切り口をしっかりと見ないわけにはならない。そんな酷いことをする役目が僕にも回ってきそうな気配だったが、そんな事は僕には到底できることではない…。仕方がない、僕は、動かないように男を後ろから抑えている役を やることになってしまった。手元にあった、何かの広告が印刷された紙を男の顔に当て、彼が苦りかかっている、人の背ほどの高さの丸太だと、後頭部まで回しこんだ。「ヤーッ！」と刀を振る像ふった感じの軍国男。刀が当たったようだ。僕は目をつぶったまま。「これで終わりか…」と思ったが、どうやら軍国男の刀さばきはかなり未熟で、一度では上手くいかなかったのか、その後も二度、三度と切りつけるのだった。切り口は当然、酷い事になっているはずだ。軍国男が「すまん！一見れない！」と謝るのが聞こえた。下手くそな刀で何度も切られ、その切り口を見ることも拒否されてしまった良わ る男は、絶望の声で「（僕を）退学にしてください！」と叫んだ。僕はこの光景を見ないようにして、その場からそっと立ち去った。

7/21 2017「スリッパ」

行ったことのない家に滞在している。古く、昭和の時代に建てられたような家。中は結構広そうだ。一緒に泊まっている友人もいるが、知らない人ばかりだ。中庭に面した廊下に木製の靴箱が置いてある。靴を置くところが斜めになっているタイプだ。靴箱の上には漬かの飲みかけのジュースやコーラなどが置いてある。靴箱にはスリッパが入っているのだが、僕の目の前で、見えない手によって箱蓋に挟まったまま、上に、下に、何足ものスリッパがものすごい速さで場所を移動させているのだ。魔法のよう、真っ昼間だというのに不思議なものを見てしまった。この家のことを知ってそうな女性が居たので、今起こった不思議な事を伝えなければと近づいた。「この家には幽霊が居るのですか？さっきあそこのスリッパが」彼女は驚きもせず、いつものことだというような顔をして、短い言葉で説明してくれた。飲みかけのジュースはそのためのものだったのか。玄関に、旅行者とみられるアジア系の女性たちが入ってきた。ここは旅館だったのだ。

徳永雅之 Masayuki Tokunaga
1960 年 長崎県佐世保市生まれ 埼玉県桶川市在住 画家
http://www.tokunagamasayuki.com/

トポス高地 2017
徳永雅之展
2017 年 9 月 1 日〜9 月 30 日
@ アリコ・ルージュ / 長瀬町

個展
10 月 11 日（水）〜18 日（水）
ギャラリー校舎亀
https://echo-enn.jp/

トポスパブリック
徳永雅之 光の絵画
2017 年 7 月〜9 月
@ 医療法人北島眼科クリニック / 長野市

分枝 ブランチング 発行 : クマサ計画 〒389-1226 長野県上水内郡飯綱町川上 2755-950 phone: 026-405-7519

うぬぼれ・深読み・柳宗悦

Shigenobu BUSUKA 1945-
備仲臣道

一九二二（大正十一）年一月五日、柳宗悦はソウルの南方にある冠岳山に登った。李朝陶磁の窯跡を探索するためであった。（高崎宗治編『反川巧全集』草風館）

このとき、柳は三十三歳で、東京帝大哲学科を出て、すでに著書も持っている宗教学者であった。その一方でパーナード・リーチ、浜田庄司との親交もあって陶磁の美に強い関心を示していたし、李朝陶磁の研究者である浅川伯教・巧兄弟と知り合ったのを機に、李朝美術にも眼を向けて、朝鮮民族美術館の建設を目論んでいた。（柳宗悦『民藝四十年』岩波文庫の年譜）

冠岳山はソウル南山の南で漢江を渡って九キロの南、今日の韓国安養市にあって、ソウル南大門駅で京釜線に乗り、水原方面へ走った安養駅の、北東方向に立ちふさがっている標高六三二メートルの山である。ここに窯跡があると知っていたのは、柳に同行した三十一歳の浅川巧であった。浅川の「窯跡めぐりの一日」によれば、一行三人が安養駅に着いたのは朝の八時ころであった。文中でＹさんと記されているのが柳であることは、浅川の同日付の日記によってはっきりとする。

安養駅で下車したとき、柳の着ていた外套の毛皮の襟ブトが外れたため、途中の駅在所に寄って針を借り、それを縫った。三人は安養寺跡を見て李朝白磁の窯跡二つから数多くの破片を拾ったあと、念仏庵で一休みした。そこを発つ際に見せてもらった台所には、日常使っている器物が並んでいたけれど、ほとんどが日本製で、この国の陶磁の衰退を眼に見るようであった。

そこから急坂を登った松林の中に三蔵寺があり、一行は温突に上げてもらって、持ってきたパンや鶏肉の缶詰で昼食を取ることにした。寺で出してくれたランチミルク、ごこのまか菓子、柳たちの舌を喜ばせた。

寺の住持の池氏は、三十年前のころに、この山から採った陶土を官窯のある広州郡の分院に送っていたという話をして聞かせた。その場所を見たいと言うと、老僧自らが案内に立って山腹の細い道を登った。以前、この一帯は立派な森林で寺が保護していたが、総督府に取り上げられ、日本人の金持ちの持ち山になっており、寺では薪にも不自由するようになった、松茸も寺の周辺にしか出なくなったということを、老僧は道々一行に話した。

やがて、花崗岩の間に食い込んでいる白土の山を場所に着き、掘り出した跡を見た三人は老僧と別れた。その際、柳は老僧に礼として毛皮の襟巻を贈っている。

浅川の文中にも目記にも、老僧はずい分喜んだと記されているけれど、この部分を読んだところで、私は、はっとなってその意を測った。思わず眼い気持ちになりそうな得なかった。そうではないか、考えても見るがいい、くだらの襟巻ではこの、老僧に外套から外れて替ったものである。すなわち、壊れたものを他人にうえ、しかも買った側は外套も着ていないのに、襟巻てだけうえて、どうしたと言うのであろうか。

少なくとも私は、ここに柳、いい気なお旦那としての姿を見逃さなかったもりでいる。これは些細なことのように見えて、実はそうではない。ここにこそ柳宗悦の人生見下す視線、自分が優位に立っていると認識している者に特有の、人に貧れみを垂れる姿勢が象徴的に現れているのではないか。

年譜によれば、一八八九年三月二十一日、東京市麻布区市兵衛町に柳橋悦の三男として宗悦は生まれている。父は海軍少将であったから、この時代の日本の文句なしの上流階級の子であった。麻布幼稚園から学習院初等学科、中等学科と進んだ宗悦は、親時間をもらって学習院高等学科を卒業し、東京帝国大学文科大学哲学科に入学、二十四の年にそこを卒業した。一般民衆にはろくろく学校へいけない者の多かった時代に、いわゆるエリートコースを歩んだ人間が柳宗悦であって、そうした人間のすべてがそうだとはけっして言わないけれど、なんの苦もなく生きて来た者の持つ、下層民衆への冷たい視線を、柳は自身でも気づかないで身内に養ってきてしまったのに違いない。そのことが、壊れた歪夜の襟当てを、案内の礼として人に くれてやるという行為に現れているのである。

柳君のように我がまま、で、自分に隠蔽するものが自身を尊敬するものかでなければ容れられぬ人物にとって、朝鮮の工芸を通じて朝鮮と朝鮮人を愛し得たのは、幸福だったといえるかも知れない――と安倍能成は「柳宗悦君を惜しむ」という文に書いている（反信能成『洋詩集』岩波書店）。このように、柳は情大で、自身に対する思い入れの強過ぎる人物であった。ついでに記せば、柳の李朝美術への理解は浅川巧を媒介としている。浅川には冷ふかに話せた朝鮮語が、柳にはできなかった。明らかに柳は民衆の中へ入っていかなかった。

ここで、長々と書いたが、柳のお旦那としての姿を浮き彫りにしたかったからであるが、同時にまたそれだけではない。こうしたお旦那の視線、目下のものを見下し、哀れみを垂れる彼の視線や姿勢が、自ずと李朝の美を「悲哀の美」と見誤った根っ子の所にあり、「朝鮮民衆の友人」と自ら任じた柳の表現々な姿であると言いたかったからに違ひなかろうか。

柳は「朝鮮の友に贈る書」（『民藝四十年』所収、岩波文庫）の中でつぎのように言っている。

私は朝鮮の藝術は、愛の訪れを待つ藝術ではない思う。それは人情に憧れ、愛に活きたいの藝術であった。永い間の酷い痛ましい朝鮮の歴史は、その藝術に入知れない淋しさや悲しみを含んだのである。そこにはいつも悲しさの美しさがある。涙にあふれる淋しさがある。私はそれを嘆める時、胸にせせる感傷を抑え得ない。かくも悲哀な美がどこにあろう。それは人の近づきを招いている。温かい心を待ちわびている。

朝鮮詩が話せなかった、民衆の中に入っていけかなかった柳には、彼らの持つ不屈で、おおらかで、エネルギッシュなどがつかめなかったとしても無理はないのであろうが、朝鮮の美を説明するのに窮して、ついに「苦悶の歴史」のせいにしたのである。この悲哀の美論ごそは、そのまま柳の思想の美でもくてなんであろうか。

この文章は、日本の朝鮮政策に対する批判の書であるというが、彼はその中で三・一独立運動に触れてこう言っている。

ここに反省をどいたい一事がある。吾々が剣によって貴方がたの皮膚を少しでも傷ける事が、絶対の罪悪であるように、貴方がたも血を流す道によって革命を起してドさっていけない。殺し合うとは何事であるか。それが天命に逆い人倫に背くことを明確に知る必要がある。それはただに酷いのみならず、最も不自然な行いである。それは決して正しく和合に至る賢明な道とはなぬ。殺戮がどうして平和を齎し得よう。

しかし、考えて見るべくもはっきりとしていることは、このとき、剣によって人を傷つけていたのは、植民地支配を強行していた、柳も当然そこに含まれているところの日本人の側だったということである。なんという身勝手な言い分であろうか。天命に逆らい、人倫に背く、ただに酷いのみならず、最も不自然な行い――をしていたのは日本人、いていは柳自身だったのである。

柳の他人を見下す視線は、こればかりではない。それは「藝斉衛門拝戸」を見る」（『民藝四十年』所収、岩波文庫）という文の中にこうも書いている。

土は裏手の山から掘り出したのである。釉はがからとってきた灰である。軸釉はこがゆるんでいるのである。形に面倒は要らないのである。数が沢山出来た品である。仕事は早いのである。削りは荒っぽいのである。手はよごれたままである。釉をよそって高台にたらしてゆくだけ、窯は暗いのである。職人は文盲なのである。窯はみすぼらしいのである。焼き方は乱暴なのである。引っ付きがあるのである。だがそんなことにだわってはいないのである。またいられないのである。安もの である。誰だってそれに夢ならん方ではいのである。こんな仕事をして食うのは止めたいのである。焼物は下級な人間のすることにきまっていたのである。

読んでいて誤れば不快な気分になりそうにはいなかった。柳という人の、驕って人を見下す辺り憚らぬ体臭がここには匂い立っている。

柳は「雑器の美」という文に同じようなことを書いている。

ほとんど凡ての職工は学もなき人々であった。なぜ出来、何が美を産むか、これらのことについては知ることがなく。伝わりし手法をそのままに承け、感ラことも なく作りまた作る。何の理論があり得よう。まして何の感傷が入り得よう。雑器の美は無心の美である。

たとえば、陶工が無学文盲であったとしても、彼が体に刻むようにして覚えた技術は、彼にとって歴とした教養ではないか。その手練れの挙が作品の美を生む。従って、文盲と決め付けられた陶工のほうが、出来上がったものにあとから得手勝手な深読みを加えて悦に入っている、東京帝大出の柳よりも、こと陶磁に関しては知識を持っていらはずである。

それは朝鮮の脆茶碗である。それも貧乏人が不断ぎらに使う茶碗である。全くの下手物である。典型的な雑器である。一番値の安い逆物である。作る者は専下して作ったのである。個性等詞るどころではない。使う者は無造作に使ったのである。自慢なとして貴った品ではない。誰でも作れるものである。

備仲臣道 Binnaka Shigemichi 1941-
韓国忠清南道大田生まれ 東武東
早稲田一高等学校卒 山梨時事新聞記者 月刊新山梨編集発行人
2006 年、第 6 回阿佐田哲也賞優秀賞受賞
著書『幕る朝鮮文化』（明石書店）『高句麗残照』（批評社）『古馬遼太郎と朝鮮』（批評社）
『あるる有朝日本人の玄孫』（社会批評社）『内田百閒文学散歩』（恵星社・2013 年 8 月）（ほか 5 冊。
kazenonogure@yahoo.co.jp

『酔本ラプソディー』恵星社・刊、1 4 0 0 円＋税。2016 年 6 月 29 日発売。
江戸前文学に魅せられ、酔本を刊行して 50 年。
坂本龍の発想は、前金、活亡、入閣に彩られた 70 余年の生涯を編く初の評伝。
● 書店にない場合は出版社にお申し付けください。
恵星社 東京都千代田区神田神保町 3 − 1 0 03-6272−9330

FLATFILESLASH Warehouse Gallery
ナガノ ノカルタナティブ
ナガノノカルタナティブ 2017.02
「プリペンション」松本喜雅展
9 月 7 日（木）〜9 月 17 日（日）
● 松本喜雅 x 丸田恭子クロッシング 9/18（月）− 9/24（日）
autumn crossing
ナガノノカルタナティブ 2017.03
「プリペンション」丸田恭子展
9 月 25 日（月）〜10 月 8 日（日）
★ 丸田恭子 x 広瀬勝クロッシング 10/9（月）− 10/15（日）
ナガノノカルタナティブ 2017.04
「プリペンション」広瀬勝展
10 月 16 日（月）〜10 月 28 日（土）
ナガノノカルタナティブ 2017.05
「プリペンション」北澤一佳展
11 月
http://flatfileslash.com
gallery@flatfileslash.com
FLATFILESLASH / Warehouse GALLERY / Lounge Gallery
FLATFILESLASH Lounge Gallery
ウチダゴウ個展
9 月 30 日（土）〜10 月 7 日（土）
（休廊日 10/1 日曜日 10/2 月曜日）
TOPOS
http://toposnet.com
トポス高地 2017
9 月 徳永雅之展
10 月 ニノ宮知子展
11 月 松本喜雅展
12 月 斉藤瑞美展
アリコ・ルージュ / 長瀬町藤原 / 水曜休み
http://homepage3.nifty.com/haricot/
トポスパブリック 2017
7−9 月 徳永雅之展
1 0 − 1 2 月 たかはしびわ展
2017 年 1−3 月 吉村江美展
@ 医療法人北島眼科クリニック
一時間の詩 (公開録音)
五十嵐あさか・平松貴大・ウチダゴウ
2017 年 9 月 21 日（木）
老小舎
17 時会場 18 時開演 19 時終演予定
〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1990-3407
http://www.muglkoya.com/jp/ 問い合わせ
入場無料・要 1 ドリンクオーダー
マリオネットオペラ VolVI 「トゥーランドット」−プッチーニ作
2017 年 1 1 月 1 1 日（土）14：00 開演
カクト文化ホール小ホール
チケット前売り ¥2000 当日 ¥2500
全席演出出演 いいづな山妖精協会
お問い合わせ 026-253-7551 徳武紀子
ギャラリー校舎亀
https://echo-enn.jp/
亜アートコンペ 2017
2017 年 10 月 1 日（日）〜10 月 29 日（日）（無休）
9：00 〜 17：00
坂井祐麗 舞妻料理処「雅」伊設 ｱｰﾄｷｯﾁﾝBlanc(ブラ) 設置・初刊展
〒389-0804 千曲市大字内倉 1855-1 Tel:026-275-0033(代)
公式ウェブサイト http://kayaartcompetition.com
亜アートコンペ実行委員会
〒389-0822 長野県千曲市大字上山田 671-2 梅田施風工房内
問い合わせ Tel:026-276-1316